

石巻復興 NEWS

石巻専修大学経営学部 丸岡ゼミ 平成 24 年 8 月 31 日発行 第 14 号

人と人が繋がる新しいツアー ～石巻元気トリップ～

6 月 22 日から 24 日に H.I.S 主催で NPO 法人オンザロード協力『第 16 回 石巻元気トリップ』が行われました。

この『石巻元気トリップ』は、石巻でボランティア活動をしてきたオンザロードと旅行会社 H.I.S の協力で行われました。石巻に住んでいる人々と交流し、石巻を元気にしよう！という趣旨のツアーです。

普通のツアーとの違いは、地域復興に貢献できるということ、オンザロードのボランティア活動の詳細を聞けること、現地の人と沢山交流できること、などです。

ツアーに参加した人数は 40 名弱で 20 代の女性が半分以上を占めていました。一度被災地の状況を確認したい、オンザロード代表の高橋歩^{あゆむ}さんに会いたい、というような動機で参加した方が半分以上を占めていました。

このツアーの中で 6 月 23 日に石巻専修大学で丸岡ゼミによる「生徒による被災体験」、「ボランティア活動に対するアンケート調査の集計発表」「丸岡泰教授による特別講義」を行いました。生徒による被災体験では涙ぐんでいる方が何人もおり、固唾を飲んで聞いていました。

ボランティア活動に対するアンケート調査の集計発表ではグラフに表した事で参加者の人々から「実際こういうものだったのか」という感心した声が上がっていました。丸岡教授の特別講義では地図などを用いての詳細な説明があり、参加者は興味を持った目で講義に集中していました。

その後、オンザロードの魚谷浩^{うおたにひろし}さんによる「オンザロードによる活動報告」がありました。オンザロードは震災直後、泥だしや炊き出し、引越しの手伝いを行って



「大おちゃっこ」で旅行者に情報提供

きました。日に日に、変わっていくニーズに対応し、仮設住宅の支援や子供の遊び場作りを行ってきました。そして、現在は H.I.S と協力し、復興支援ツアーを開催したり、オンラインショップ「復興デパートメント 石巻元気商店」を開設したりしてきました。

石巻専修大学の発表とオンザロードの発表が終わった後、石巻専修大学食堂前広場で「石巻焼きそば」がふるまわれました。「石巻焼きそば」とは二度蒸すことによって茶色になった麺を使用し、イワシなどの魚の出汁をかけ、蒸し焼きにし、最後に目玉焼きをトッピングしたものです。石巻では有名なご当地グルメであり、B 級グルメが集う B-1 グランプリに参加し、見事第 6 位という輝かしい成績を残した B 級グルメです。

参加者の人々は初めて見る石巻焼きそばに生唾を飲み込みながら興奮していました。味は普通の焼きそばより味はさっぱりしていて、魚の出汁のほのかな香りが食欲をそそられました。後にかける「石巻焼きそば専用ソース」はフルーティーで酸味があり、また違った味わいが楽しめます。高橋歩さんもこの石巻焼きそばを絶賛していました。

午後になり、石巻専修大学の 2 号館で「お茶っこ」が行われました。「お茶っこ」というのは宮城県の方で「お茶会」という風な意味を指します。

このお茶っこでは参加者やオンザロードの人たちがテーブルに 6 人前後が座り、わいわい楽しくお話ししようという企画でした。筆者が座ったテーブルでは西日本から来た人々が座り、東日本と西日本での地震に対する意識の違いなどを話し、また 60 代以上の男性からは津波による塩害や女川原発についての質問があり、震災に関する様々な問題について意見を交換することができました。

今回私たちがこの『石巻元気トリップ』に参加した事により、県外の人々の意見を聞くことができました。参加した人の中で私に「被災地の現状や石巻の魅力に触れることができて良かった」と話してくれた方もいました。また、ツアーを通して関東に住んでいる方と繋がりを持つことができました。このツアーは県外の人々と被災地の人々との新たな繋がりを作りだしてくれる良いツアーだと思いました。



高橋歩さん石巻やきそばを絶賛！

ひさみちけい
(久道溪)

生死を分ける現場の判断

「もう、大丈夫だよ。」

救助した人々にこのような元気づける言葉をかけることは許されなかった、と辛そうに語る石巻広域消防の大江さんの姿が私（筆者）の頭に残りました。

日に日に蒸し暑くなり、夏に差し掛かる6月16、17の土曜日と日曜日を利用し、私たちは東洋学園大学と「熟議カフェ」という企画を行いました。

この企画では、石巻広域消防の大江さんを招き、東日本大震災時の活動を聞きました。大江さんによる話は一時間程のものでしたが、当時の状況がひしひしと伝わってくる内容でした。

最も印象的なエピソードは、震災直後の三日目くらいから行われた、ボートを使用した救助活動についてです。

震災により冠水した地域をボートで捜索し、人影を見つけ、少しでも動きがあれば救助するという活動を行います。この際、動かない者に時間をかけなかったのは、素早く救助活動を行うことにより、救える人を少しでも増やすためです。

また、いざ救助して意識を取り戻したものの、「もう大丈夫ですよ。」など安心させるような言葉をかけると気が緩み、そのまま亡くなってしまう場合が多かったそうです。その後、そうならないよう、救助した人には「このような状態の人はあなただけではない、だから頑張るんだ。」と叱咤激励するようにしたところ、多くの人が一命を取り留めました。

そして、救助された方々は、石巻赤十字病院が「連絡無しで、救助された全ての住民を受け入れる。」と発表していたので、そこに運ばれました。それにより60人以上の人命が救われました。これも病院側の素早い判断のおかげとも言えます。

これらのように、非常時には上の立場の人間からの指示を待つだけではなく、現場の人間の素早く適切な判断が必要だということを学びました。いつ我が身にそのような事態が発生するか分からないので、私も時と状況によって適切な判断を下せるような人間になりたいです。（末永寛二）



石巻広域消防の活動の説明に聞き入る参加者

エコツーリズムと被災地復興

「熟議カフェ」あるいは別名「ほえ～るかふえ」とは、東洋学園大学の泰松ゼミが石巻で試みている、1つのテーマに対してグループ別に話し合い、そこから最終的に解答を探っていくという問題解決の方法です。

6月17日の日曜日、まず初めに泰松ゼミの学生によるエコツーリズムの発表がありました。

泰松ゼミではラオスにおけるエコツーリズムの研究を行っています。エコツーリズムとは、自然環境や文化・歴史などを観光の対象としながらその持続可能性を考慮する旅行のことです。ラオスの事例は、現地住民に現地の自然を活かしたサービスや経験を観光客に提供してもらい、環境資源の保護や地域振興に貢献しながら観光を行うことができるというものです。登山、ハイキングやサイクリングなどが可能だそうです。

産業が乏しいラオスにおいて、このエコツーリズムによる観光業は大きな収入源になる可能性があるため近年関心が高まっているそうですが、あまり観光客を受け入れると逆に自然を破壊してしまう矛盾を孕んでいます。相反する経済効果と両立させるという挑戦が必要になる、難しい取り組みです。

泰松ゼミによると、ラオスは5歳未満の子供の死亡率が10%を超えるような発展途上の国だそうです。このエコツーリズムを上手く普及させ現地住民に資金が回るようにすることで、このような死亡率を減らせるようにするなどラオスの振興についてこれからも考えていくそうです。

昼食を挟んで、午後からは「復興」をテーマに、東洋学園大学の学生と石巻専修大学の学生が意見の交換を行いました。

その中で感じたのは、私のように実際に被災地に住む学生と今回来た東京の学生の間で復興の考え方に違いがあるということです。

被災地に住む学生は、なかなか進まない震災がれきの処理や未だに全線復旧の目途が立たないJR仙石線などのように、今でも復興の遅れを感じながら生活しているためか、復興に対してネガティブな意見が出ていました。

それに対して東京の学生は、大きな被災はしていないためか、復興についてもポジティブな意見が多く出ていました。例えば、東京ではキャンプをする場所が少ないことに目をつけ、津波により建物などが流されて出来た広大な土地を活かしてキャンプ場を造ることで人を呼び込むといった意見など、震災で失った物を有効活用するという考えは、被災者感情の観点もあり被災地では余り無かったように感じます。

これからも実際に被災地で暮らしていくのは私のような現地の人間です。今回のほえ～るかふえを踏まえ、復興についてもっと前向きに考えていくことも必要だと感じました。

（内海善樹）

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

E-mail senshu-maruoka@inter7.jp